NEW TRADITIONAL PLAYING BOOK

2022

楽しい実験と実践

NEW TRADITIONAL

福祉×伝統工芸の可能性に着目し、2019年に奈良の一般財団法人たんぽぽの家がプロジェクトをスタート。福祉施設とデザイナーの協働によるものづくりや展覧会、産地や素材をめぐるリサーチツアー、職人と障害のある人の技術交流など、地域・福祉・工芸をつなぐ活動を展開しています。2022年には、ものづくりについて学び合う「ニュートラの学校」を立ち上げました。

https://newtraditional.jp/

楽しい実験と実践

NEW TRADITIONAL PLAYING BOOK 2022

たたく Beat ―― 4-7

ふれる・ほぐす Touch & Loosen ―― 8-11

さがす・きづく Search & Find ―― 12-15

かく・ぬる Draw & Paint ―― 16-21

みがく Rub & Polish ―― 22-23

たす・かさねる Add & Layer ―― 24-27

そだてる Raise & Grow ―― 28-31

ニュートラディショナル15の覚書 ―― 32-45

関連プロジェクト ―― 46-47

手を動かすと、心が動く。

素材に触れたときの気持ちよさや、
そのものの匂い、聞こえてくる音、
道具に身体が馴染んでいく感覚。

ものづくりの現場で手を動かしてみると、
身体がつくる喜びで
満たされるのを感じます。

ニュートラでは、
ものをつくるときの感覚を
共有することも
大切にしてきました。

つくる過程では、いくつもの
実験を繰り返し、
素材や土地の
文化についての学びがあります。

偶然の出会いや手を動かし生まれる発見から、
思いもよらない技法が生まれることも。

ぜひ、匂いや音や感触を
想像しながら、
ページを繰ってみてください。

ものづくりの楽しさや喜びが、
みなさんの心に届くことを願って。

たたく Beat

1. 奈良県曽爾（そに）村の木工加工所で行ったワークショップ。針金で好きなかたちをつくり、それを金づちで木に打ちつけて模様をつくった

2. 奈良県黒滝村の材木屋から仕入れた木材

1.

2.

裏側も
まんべんなく

3. 手に収まるくらいの石で木材を無心でひたすらたたく

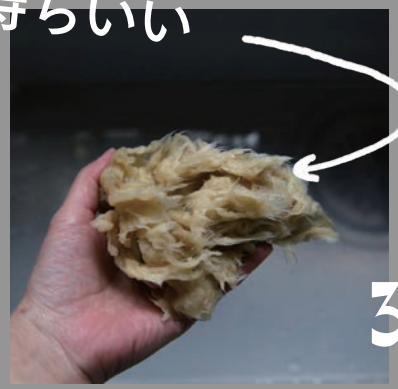
4. たたく道具や道具と木材が当たるところによって、木の表面の質感が不規則に変わる

5. 奈良・Good Job! センター香芝（以下、GJ!センター）にて、メンバーとともにワークショップ。「カンカン！」といい音が響く

6. ろくろ舎の酒井義夫さんを交え、最後はみんなで記念写真

ふれる ほぐす

Touch & Loosen



1. 三輪山の麓から奈良に通じる山の辺の道。道中に点在する小屋の土壁を触る。土壁は竹の芯（コマイ）に泥団子を重ね、藁などの繊維質（スサ）や小石、漆喰も使ってつくられている

2. 杉を張り合わせた板は、継ぎ目がわからないほど、なめらかな触り心地

3. 和紙の原料となる楮を水につけやわらかくし、表面の黒皮を取り除き、苛性ソーダやソーダ灰を加えて煮る。原料の繊維を細かくほぐし、トロロアオイの根から取り出した粘剤を混ぜ調整していく

4. 5. 6. 平城京の土を使った創作体験。土で布を染める。まずは土を乳鉢ですりつぶし、ふるいにかけて細かくし、水を加えて練ったあと、布をもみ込む

7. 講師のデザイナー・高橋孝治さんから「きれいな泥をつくるぞ、という気持ちで楽しんでください」と一声。しっかり練っていると、だんだんと、各自が砕いた土の色の違いが現れてきた

さがす きづく

Search & Find

1.

2.

「赤い石」
「ひし形の石」
「アイスバーのような石」

1. 山の斜面に生える木と谷底に流れる川。木をたたく道具を考え、河原にある石を石器のように使うことにした

2. 石を何かに見立てる。好きな形、持ちやすい感触、それぞれが好みのものを探す

3.

ぎゅっ、ぎゅっと
雪を踏みしめ山に入っていく

4.

5.

3. 山形のデザイナー・吉田勝信さんとかんじきを履いて、雪山に入る

4.5. 植物を吉勝制作所に持ち帰り、箔押しの機械を使って形を紙に定着させ、それぞれのノートをつくる

6.

6. 京都府長岡京市の高野竹工の職人が管理する竹林へ。普段見ることのないさまざまな種類の竹を教えてもらいながら、竹の生態や素材としての使い方などについて聞く

7. 歩いたり、立ち止まったり……。土壁を見ながら人の営みがつくる風景への関心を話し合う

7.

みんなで眺めると
発見がある

かく

Draw & Paint

ぬる

1.

ろくろをまわすと、
すーっと線が描ける

2.

3.

1.2. 伝統こけしの工人とのプロジェクトや、ドンタク玩具社として活動を行う軸原ヨウスケさんを招き、マジックや筆を使ってこけしと棒人形に描くワークショップ。筆の形や太さを生かすことが模様になる感覚を体験できるよう、即席のろくろで試してみる

3. メンバーのたむちゃんがつくった棒人形。短い時間でたくさんできた

4. 常滑のタイルに、釉薬を塗っていく

5. GJ! センターの張り子づくり。丁寧に塗り重ねることで発色がよくなる

6. 鳥取の因州和紙でつくった張り子の紙仏。カラフルに仕上げていく

ローラーでコロコロ

7. 同じ型でも、仕上げによってまったく印象が変わる

8.9. 山形で緞通（だんつう）の模様をつくる「えのぐのワークショップ」。さまざまな素材や道具に触りながらつくっていく

10. 奈良県葛城市の「燕さんじょう亭」の改修で、土壁づくりを体験。藁と土と水を、壁にあわせた配合で混ぜ、コテを使って大胆に壁を塗っていく

11. お蚕さんのお世話をした日に、GJ!センターのメンバーが絵日記を綴る

みがく Rub & Polish

2.3. GJ! センターの張り子づくり。和紙と新聞紙を糊で重ね、乾燥させて、凹凸のある部分をスプーンでこすり、ならしていくことで、きれいな素地ができる

1. 春日大社境内の杉でつくられた燭台。枯損木(こそんぼく)(古くなったり台風などで倒れた木)をウッドターニングで削り出し、オイルや酢鉄を使って染め、拭きあげていく

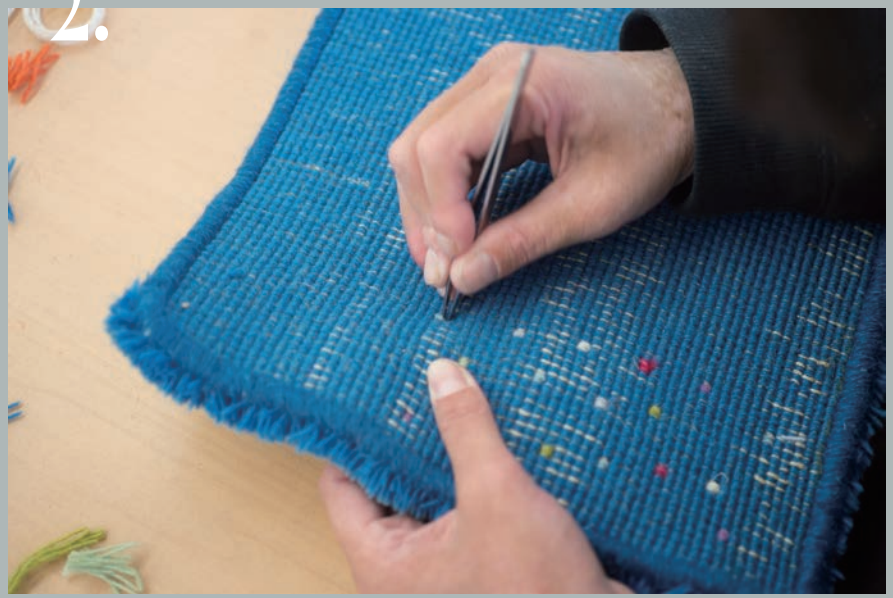
たす かさねる

Add & Layer

1.

1本ずつ、
色をたしていこう

2.



3.

4.

できたー！
カラフルになった

1. 緞通の補修の技法「植え込み」を応用して無地の緞通に柄をつけていく
2. 緞通の裏。ひとマスずつ毛糸を抜き、色をさしかえて植えていく
3. 好きな柄で練習する。完成した喜びが伝わる
4. 山形県の米沢緞通・滝沢工房の滝沢幹夫さんに「植え込み」の技法を教えてもらう

4.

5.

4.5. 高野竹工にて、竹かごなどの編み方のひとつである「六つ目編み」を教えてもらう。途中からはそれぞれの自由な表現が加わっていった

6.7. 竹の端材や小さなパーツを組み合わせたモビールづくり。竹に顔の模様をつけたり、音が鳴るものも。最後は、みんなの作品を吊るしてにぎやかな空間に

6.

7.

そだてる

Raise & Grow

1.

3.

4.

瑞々しい匂い

2.

1. GJ! センターで育てている、純日本産のお蚕さん「小石丸」。食べたあとの葉や糞などの掃除をする。お蚕さんのまわりは常にきれいにしておく

2. お蚕さんの食料は桑の葉。より青々としているおいしそうな葉を選ぶ。収穫するのも大切な仕事

3. やさしく、真剣にお世話をする

4. 桑の葉を食べて大きくなるお蚕さん

5. 漆の里、奈良県の曽爾村で行われた、地元の人たちが主催する漆の植樹会に参加。今では日本産の漆は貴重であることを知る

6. 植樹を記念して、切り株にサインをさせてもらう

7. 今は苗木だが、10～15年かけて育った木から漆が採れるようになる

ニュートラディショナル 15の覚書

私たちプロジェクトメンバーがニュートラに取り組むなかで、手を動かしながら考えたことや気づいたこと、各地で出会った方々から教えてもらったこと、ものをつくる上で大切にしたいことなど、共有していきたい15のことを覚書として記しました。

1. 愛と祈りのものづくり

「伝統のものづくりには、愛と祈りが込められている」。これは、たんぽぽの家理事長の播磨靖夫が語った言葉です。そこには、自己中心的な態度ではなく、身近にあるものを見つめ直す姿勢、ものの背景にある生活や文化を大切にしたいという気持ちが込められています。ニュートラの根幹には、いつもこの言葉がありました。

春日大社境内の枯損木（こそんぼく）をいかしたものづくりに取り組んだときのこと。奈良の高畑で器を中心としたギャラリー「空檜（そらみつ）」を営む五井あすかさんが「燭台をつくりませんか」と提案してくれました。慌ただしい日々のなかで、ろうそくに灯りをともす時間をもつことが、穏やかなひとときにつながる。ハッとすると同時に、ものを通して、そういった時間の大切さも提案できることに気づきました。

2. 存在そのものを愛おしむ

東北地方で伝統的につくられてきた「こけし」。山で木材を挽き、お椀などを制作していた木地師たちが子ども向けのお土産品としてつくりはじめたとも言われています。近年は、多くの郷土玩具と同様に、飾りとして存在そのものを楽しむという人が多いのではないでしょうか。

ものには、用途を満たす機能だけでなく、存在そのものの魅力もあります。こけしもまた、そうした「内在的な価値」を感じさせてくれるもののひとつかもしれません。

福祉施設で障害のある人がつくる人形やお地蔵さん、郷土玩具などを「おもしろい」「かわいらしい」「なぜか惹かれる」と手に取る人を見かけると、人は、用途だけではない、そのもの自体の魅力に惹かれるのだと感じます。

時には、子どもの健康を祈ったり、誰かの幸福を願ったり。郷土玩具と呼ばれるものに宿る、親しみやすさやかわいらしさには、理屈では語ることができない意味が込められています。

3. 使う側からつくる側にまわる

ものを囲み、愛でながら、集まった人たちと言葉を交わす時間をもちたいと考え、お茶会を準備していたときのこと。席主をお願いしていたippo plusの守屋里依さんの「障害のある人がお茶をいれる側にまわったら、楽しいと思いませんか」という一言から、Good Job!センター香芝（以下、

GJ! センター）の花谷龍介さんがお茶をいれることに。花谷さんは、守屋さんとともに、お茶の道具の一つひとつに触れて練習をし、季節のお菓子を揃え、お客さまとお茶の時間を共有しました。すでに用意された場を楽しむだけでなく、自分たちの手でもてなしの準備をし、場をつくる。それにより、訪れた方々とより深く交流することができるという手ごたえを得ました。また、いざ何かをつくろうと思うと、材料調達のために出かけたり、わからないことは誰かに聞かなければいけません。そうした過程のなかに、楽しさや出会いがある。「つくること」を通して、障害のある人も含めた共同体を地域のなかにつくっていく可能性を感じることができました。

4. 誰でもつくり、誰でも直すことができる

奈良盆地の山裾を縫うように南北をつなぐ「山の辺の道」という古道があります。その歴史は古く、『古事記』や『日本書記』にも記されるほどです。『泥小屋探訪 奈良・山の辺の道』（LIXIL 出版、2005 年）の出版に関わったINAXライブミュージアムの髙橋麻希さんと磯村司さんとともに、山の辺の道を訪れたときのこと。今も素朴な土壁でつくられた小屋が多く残っていることに驚きました。さまざまな大きさの石や粗さの異なる土が層になる土壁からは、そこに暮らす人々の手で崩れたら直し、使い続けられたことが伝わってきました。

また、建築家の森田一弥さんと一緒に、京都市北区にある大徳寺敷地内の土壁をめぐった際には、そこにある地面の土を素材としてつくられていることに気づきました。風化した部分は、時代ごとに職人や住人により補修が施されていたようです。

ものがシンプルな構造をもち、身近に入手できる素材でつくられていると、誰もがそれを使ったり、つくり直したりすることができます。また、ものづくりに参加する、身のまわりにあるものを自分でつくり、直すということは、ものの構造や仕組みを理解し、ものとの関わりを深めることにつながります。

5. ゆらぎや遊びの幅をもたせたものづくり

商品開発においては、正解と不正解、適合と不適合など「ゆらがない」ための基準を設けることもしばしば。それは、福祉施設でのものづくりも例外ではありません。山形のデザイナー・吉田勝信さん、米沢緞通・滝沢工房、3つの福祉施設（わたしの会社、さくらんぼ共生園、くらら）が取り組んだ緞通（だんつう）づくりで設けたのは、最小限のルールだけでした。修復の技術である植え込みの技法を使い、点々やバッテンを描くといった決まりごとのなかで、どのように模様を描いていくかは、つくる人に委ねました。ルールを最小限にすることで、ものづくりにゆらぎや遊びが生まれ、ユーモアや脱線も許容するような余地が出てきます。その結果、一部の人だけではなく多くの人が、緞通づくりに参加することができました。一人ひとりの創造性や

表現、個性が立ち上がってくるようなものづくり。正解も不正解もない、適合も不適合もない、失敗も間違いもないようなものづくり。そうした仕組みをつくることから、新しいものが生まれてくるかもしれません。

6. 誰がつくったかわからない／誰かがつくったものづくり

ものづくりには、つくった人の行為や存在の結びつきが独自の魅力となるよさもあれば、複数の人で分業してつくることのよさもあります。

たんぽぽの家で手織りに取り組む福岡左知子さんの作品《miamoo.（ミィアムゥ）》。大胆な糸のもつれやほつれには、左手だけで織る福岡さんの行為の痕跡が色濃く現れています。

一方、たんぽぽの家で20年にわたって手びねりでつくってきた「厄除鬼」を、もっと多くの障害のある人の仕事として成立させるために開発したのが、石膏型を使った鋳込み製法の仕組みです。石膏型に土を流し込み、生地を乾燥させ、焼き、着彩し、梱包する。明確な工程があり、分業できるからこそ、それぞれが得意とする部分でものづくりに関わることができるようになりました。

つくった人の痕跡が残る手仕事と、分業でたくさんの人が関わってつくられたもの。どちらにも固有の魅力があり、どちらもあってもよい。私たちはそう考えています。

7. つくる過程の喜びを大切にする

デザイナーの川﨑富美さんは、張り子をつくるときに昔ながらの方法にこだわっています。その理由のひとつは、海藻由来の布糊（ふのり）を紙に塗るときの手触りの気持ちよさ。鳥取のアートスペースからふるに通う障害のある人と共同で行った和紙づくりでは、その気持ちよさや楽しさを知ってもらうために、いくつもの新しい和紙のつくり方を考えました。

掬（すく）うだけで障害のある人が描いたキャラクターの形をした和紙ができる型をつくったり、和紙を丸めて銀河のような模様を表現したりと、これまでの和紙づくりの概念では思いつかないような方法で生まれた作品の数々。川﨑さんとアートスペースからふるのメンバーがつくった和紙の作品は、見る人にも「つくる楽しさ」を伝えるものになりました。手仕事でものをつくるには時間がかかりますが、その過程には、素材に触れる心地よさ、自分でつくるからこその愛着など多くの喜びもあります。手を動かしながら言語化、数値化しにくいような感覚を共有することも、伝統のものづくりを身近に感じるきっかけのひとつになるのかもしれません。

8. 目の前や足元にあるものを素材にする

「身近なところに、ものをつくるきっかけがある」。これは、常滑を拠点に活動するデザイナー・高橋孝治さんの言葉で

す。高橋さんがデザインワークなども請けおう常滑の福祉施設・ワークセンターかじまで柵づくりのために敷地内の地面を掘っていたときのこと。掘り進めると粘土層にあたり、その土が常滑の窯業で使っている土と共通していることに気がつきました。

どこかから特別な素材を調達してこなくても、目の前にあるもの、足元にあるものがものづくりの素材になることがあります。素材が土地の産業や歴史について知る手がかりとなり、ものづくりにより愛着や誇りをもたらすこともあるでしょう。もちろん、気軽に購入できる素材を使うのも方法のひとつ。しかし、その土地にある素材を使うからこそ伝えられる、文化や風土に寄って立つことができるようなものづくりもあるはずです。

9. 素材と出会い、つくるを発見する道具

一般的に、木を素材としたものづくりには、大きな機材や刃物などの道具が必要です。障害のある人たちがもっと簡単に、木にアプローチできる方法はないかと、木地師の酒井義夫さんと考えました。そこから鍋の打ち出しのようにたたいて模様をつけ、みがくというシンプルな行為が生まれました。この方法であれば、同じ手順を繰り返す作業が好きな人や、細かな作業が苦手な人も取り組むことができる。そして、その結果として、魅力的な何かがつくれるのではないかと考えました。また、奈良は吉野杉をはじめとする木材の産地。奈良県南部や東部には銘木屋（めいぼくや）や工房があり、建築素材や食器などの商品をつくったあとに出る余材を仕入れることができました。

はじめは、丸い形のハンマーでたたき模様をつけていましたが、あるとき、木の仕入れのために奈良の黒滝村に向かう道中で、河原に石があることに気づきました。そして、石器のようにたたいてみたら、どんな模様になるだろうと興味が芽生え、実際に試してみることに。すると、扱いやすく誰でも参加でき、一つひとつ異なる風合いが生み出されていきました。それぞれ自分の好きな形の石、手に馴染む石を選び、たたく動作が、独特の模様をつけていくのです。

何をつくるにしても、私たちがこれまで得た知識や経験から、「こうするべき」と思っている方法とは違う、さまざまなつくり方があるのかもしれません。また、古代のものづくりや、土地につながる伝統のものづくりに立ち戻ることから、新たなつくり方を発見できるかもしれません。

そして、石は拾ってきて、使い終わったら河原に戻すことができます。ものや道具を長く使うだけでなく、手放せる。材料だけではなく、道具も循環させることができる。そこに、清々しさや気持ちよさがあるように思います。

10. 自然とともにあるものづくり

GJ!センターでは、染織家の寺川真弓さんからの提案で、毎年春にお蚕さんを育てています。お蚕さんという生き物が福祉施設にやってきたことで、空間の使い方、時間の感じ方は大きく変わりました。

桑の葉が芽吹く頃からが、養蚕のスタート。養蚕農家では秋まで４～５回､お蚕さんを育てます。GJ!センターでも、お蚕さんが卵から繭になるまでの 1ヵ月、桑の葉を採りにいき、お世話をし、お蚕さんの成長を見守ります。

伝統のものづくりは、土や石、木や植物など、自然そのものを素材とし、自然からの恵みを感じることで生まれます。小さな卵からお蚕さんが育ち、繭をつくり、その繭から糸を挽(ひ)かせてもらい、糸からものをつくる。お蚕さんを育てることは、私たちのものづくりの原点と、自然のなかで生きている私たち自身の存在に気づかせてくれました。

11. 身体を通して感覚を受け継ぐ

その土地でものをつくるということは、そこで培われてきた文化や人間関係、身体の感覚も引き継ぐことではないでしょうか。指先でボタンを押す動作ひとつで多くのことができるようになった現代、身体の感覚はかつてのものとは異なってきていると言えるでしょう。道具の進化は、私たちの身体性に大きな影響を与えています。

安藤隆一郎さんは「身体」と「もの」との関わりから身体の使い方をゼロから見直し、本来人間がもっていたはずの身体性を取り戻そうと「身体０ベース運用法」を実践。たとえば、民具（人々が日常生活のなかでつくり、使ってきた伝承的な道具類）とともに、それを操るときの身体の動きをトレースすることで、普段とはまったく異なる身体の使い方を模索します。

頭で考えず、身体を使って動作をなぞる。それは、必ずしも動作を寸分違わず受け継ぐことではなく、なぞる人の個性や動き、そのときの状況によっても変化していきます。文化や芸術は、土地とつながりながら、時代を生きる人々のリアルな生の実感を残しながら、過去から受け継ぎ、次の時代に受け渡していくもの。技術だけではなく、感覚を伝承することも大切にしていきたいと思います。

12. 技術を柔軟に取り入れる

素材や道具が入手できず、ものづくりが途絶えてしまう事例がたくさんあります。しかし、代替物を使ったり、まったく違う発想をしたりしてプロセスを補えば、ものづくりを継続させることもできるのかもしれません。

もし江戸時代にデジタル工作機があったら、使っていた職人もいたでしょう。何をつくるかという目的に向かい、最適な技術を取り入れることで、持続可能なものづくりにつながると私たちは考えます。

GJ! センターで取り組む張り子づくりは、一見伝統的なつくり方をした郷土玩具に見えます。しかしそのプロセスは、3D プリンタで出力した樹脂で型をつくり、その上に和紙と新聞紙を交互に貼って胡粉(ごふん)を塗り、着彩するというもの。木型をつくれる職人が少なくなってきたという課題からはじまった試みですが、3D プリンタを使うことで、より自由で複雑な造形の張り子をつくることも可能になりました。

13.「つくる」「使う」の先を考える

GJ! センターでは、2016年の開設当初より、3Dプリンタでつくった型を使った張り子づくりを行い、多くのPLA樹脂（植物性由来の熱可塑性樹脂）を使用してきました。その過程では、失敗作や端材が生じることも。それを何かに生かせないかと考えはじめたときに知ったのが、プラスチックを再利用する取り組みです。

プラスチック廃棄物をリサイクルし、新たな命を吹き込むためにつくられたオンラインのオープンソースコミュニティ「プレシャスプラスチック」。廃棄されるプラスチックを細かく砕き、熱を加えることで押し出して固めたり、型枠に流して圧縮したりして、新たなプロダクトに生まれ変わらせる。その工程は、現在YouTubeなどで公開され、多くの人に共有されています。

また、ファブラボの拠点づくりやバイオの研究に取り組んできた津田和俊さんは、「製品にも人と同じような一生があり、その一生に人がどう関わっていけるか」と、もののライフサイクルについて話します。捨てずに長く使う、材料のリサイクルに取り組む、リサイクルにかかるエネルギー消費、生産の規模や流通の仕組みを考える。これからのものづくりには、福祉施設においてもつくること、使うことの先にある循環をイメージする意識が必要だと感じています。

14. 届けるという感覚をもつ

バイヤーの山田遊さんは、売る前にまずものの価値を伝えること、興味をもってもらうこと、その印象を残すことが大事だと言います。山田さんがディレクターをつとめる「燕三条工場の祭典」は、ものづくりの現場である工場に買い手や使い手を招き、つくるプロセスや職人の姿勢を見てもらうことで、ものの価値を伝えていくイベント。産地に足を運び、その地域で生まれたものを買い求め、愛用する。それが、ものやものづくり、その背景である地域をも大切にすることにつながると考えています。

ものをつくるだけでなく、買ってもらうことも重要。それは自分たちがつくるものの価値を共有できる仲間を増やすことにもなります。価値観が多様化している今、ものを届け、仲間を増やすという感覚が、ものをつくり続けられる状況を生み出していくのかもしれません。

15. 不均質で違和感のあるものの美しさ

「ゴミや廃棄物も含めてものを循環させていくことを考えたとき、均質なものをつくることにこだわるだけではなくて、不均質で違和感があるものが、かえって愛でられるのではないか」。2021年に開催したニュートラ会議で、研究者の水野大二郎さんが話したこの言葉にハッとしました。手仕事による不揃いなものを愛おしむ気持ちに共感するとともに、今後の課題や目標として、ゴミや廃棄物を資源と

とらえ、循環まで見据えたものづくりを考えることにつながったからです。ものづくりの過程で捨てられてきたものを生かすことで生まれる、いびつさや不揃いな佇まい。それすらも楽しんで受容する感覚から、面白い風景が見えてくるように思いました。

東日本大震災後に、南三陸町ののぞみ福祉作業所ではじまった紙づくり。デザインユニット・HUMORABO との連携で、牛乳パックや新聞、使い終わった仙台七夕の飾りなどをプロダクトに生まれ変わらせてきました。ミミつきの和紙「NOZOMI PAPER」もそのひとつ。ミミがついているなかでも大きくゆがんでいたり、印刷作業に向かないものも失敗とせずに「WILD」と名づけて販売しています。すると、その特徴を愛で、購入してくれる人たちがいました。きれいに揃ったものだけをめざさなくてもいい。不均質なものの美しさを認められる感覚も必要だと思います。

ニュートラの実践を通して私たちが感じたことは、つくることの楽しさや幅広さだけでなく、自分たちの暮らしやこれからについても考えることにつながる、という実感でした。大量生産・大量消費・大量廃棄ではない、適量を循環させる仕組み、効率だけで図ることのできない価値、足元にある文化や素材を見つめ直す感覚は、本来、伝統のものづくりが大切にしてきたことではないでしょうか。

私たちは、そうしたものづくりを行う拠点のひとつとして、福祉施設にも大きな可能性があると考えています。地域のなかで、伝統や循環を大事に、さまざまな人たちと関わりながら、豊かな仕事のあり方、暮らしについて考え実践していく場が増えていく。そうすることで、地域はもっと多くの人にとって暮らしやすい場所になると思います。

関連プロジェクト

pp.4-5｜写真1・2
エクスチェンジプログラム―福祉と作り手の交流｜木工
2021.11.12(金)「障害のある人の表現と伝統工芸をめぐるリサーチシリーズ」@奈良　＊

p.6｜写真3・4
大極門を復原した木材にふれる たたいて みがいて つくる 木工ワークショップ
2023.03.28(火)ワークショップ@奈良

p.7｜写真5・6
エクスチェンジプログラム―福祉と作り手の交流｜木工　＊

p.8｜写真1
スタディツアー ―産地をまわり考える
2021.11.23(火) CLAY WORKS 土壁めぐり・奈良編「土地の人がつくった土壁めぐり」@奈良　＊

p.9｜写真2
エクスチェンジプログラム―福祉と作り手の交流｜木工
2021.11.12(金)「障害のある人の表現と伝統工芸をめぐるリサーチシリーズ」@奈良　＊

p.9｜写真3
わたしのニュートラ
和紙という銀河から届く光 NEW TRADITIONAL 展 in 鳥取

pp.10-11｜写真4・5・6・7
2021.11.27(土)CLAY WORKS「平城京の土でつくる創作ワークショップ」@奈良

pp.12-13｜写真1・2
エクスチェンジプログラム―福祉と作り手の交流｜木工　＊

p.14｜写真3・4・5
スタディツアー ―産地をまわり考える
2022.01.15(土)-16(日)山形編「山形の伝統工芸と福祉の可能性を探る旅」@山形　＊

p.15｜写真6
エクスチェンジプログラム―福祉と作り手の交流｜竹工芸
2021.10.26(火)素材をめぐる、障害のある人とサポーターのためのワークショップ――「竹」に触れて・感じて・考える一日―― @京都　＊

p.15｜写真7
スタディツアー ―産地をまわり考える
2021.11.23(火)CLAY WORKS 土壁めぐり・奈良編「土地の人がつくった土壁めぐり」@奈良　＊

pp.16-17｜写真1・2・3
ふくしとこけし
2022.10.26(水)ワークショップ@奈良　＊

p.18｜写真4
わたしのニュートラ
滑らかな粘土の床が、丘陵に広がる舞台の上で NEW TRADITIONAL 展 in 常滑

p.18｜写真5
Good Job はりこ

p.19｜写真6・7
わたしのニュートラ
和紙という銀河から届く光 NEW TRADITIONAL 展 in 鳥取
2022.01.29(土)ワークショップ@鳥取

p.20｜写真8・9
NEW DANTSU
2020.01.28(火)ワークショップ@山形

p.21｜写真10
2022.07.02(日)「障害のある人の表現と伝統工芸をめぐるリサーチシリーズ」土壁ワークショップ@奈良

p.21｜写真11
お蚕さんプロジェクト

p.22｜写真1
春日大社境内の杉から生まれた燭台

p.23｜写真2・3
Good Job はりこ

pp.24-25｜写真1・2・3
NEW DANTSU
2020.02.28(金)ワークショップ@山形

p.26｜写真4・5
エクスチェンジプログラム ― 福祉と作り手の交流｜竹工芸
2021.12.21(火)「障害のある人の表現と伝統工芸をめぐるリサーチシリーズ」素材をめぐる、障害のある人とサポーターのためのワークショップ@京都　＊

p.27｜写真6・7
エクスチェンジプログラム ― 福祉と作り手の交流｜竹工芸
2021.10.26(火)素材をめぐる、障害のある人とサポーターのためのワークショップ――「竹」に触れて・感じて・考える一日―― @京都　＊

pp.28-29｜写真1・2・3・4
お蚕さんプロジェクト

pp.30-31｜写真5・6・7
エクスチェンジプログラム ― 福祉と作り手の交流｜木工
2021.11.23(火)ワークショップ@奈良　＊

p.32｜春日大社境内の枯損木を生かしたものづくり
春日大社境内の杉から生まれた燭台

p.33｜お茶会
2019.10.12(土)、13(日) つくることの喜びにふれる二日間@奈良

p.34｜山の辺の道を訪れたとき
スタディツアー ―産地をまわり考える
2021.11.23(火)CLAY WORKS 土壁めぐり・奈良編「土地の人がつくった土壁めぐり」@奈良　＊

p.35｜大徳寺敷地内の土壁をめぐった際
スタディツアー ―産地をまわり考える
2021.12.12(日)土壁めぐり・京都編「職人がつくった土壁めぐり」@京都　＊

p.35｜緞通づくり
NEW DANTSU

p.36｜福岡左知子さんの作品《miamoo.(ミィアムゥ)》
GOOD JOB STORE

p.37｜和紙づくり
わたしのニュートラ
和紙という銀河から届く光 NEW TRADITIONAL 展 in 鳥取

p.39｜お蚕さんを育てています
お蚕さんプロジェクト

p.40｜「身体0ベース運用法」
ニュートラの学校 ―学びあう場づくり
教育機関との連携「0GYMで身体感覚を捉え直す」

p.41, 42｜張り子づくり
Good Job はりこ

p.42｜「プレシャスプラスチック」
エクスチェンジプログラム―福祉と作り手の交流｜Presious Plastic
2022.02.02(水)、02.24(木)福祉と職人技術をつなぐマテリアルリサーチ & ワークショップシリーズ@奈良　＊

p.42｜もののライフサイクルについて話します
2022.02.22(火)ニュートラゼミ Vol.1

＊ 日本財団「障害のある人の表現と伝統工芸の発展と仕事づくり」の助成を受けて実施

NEW TRADITIONALのWebサイトにて、音声読み上げ可能な本書PDFデータを公開しています。書字へのアクセスが難しい方はご活用ください。そのほかのお問い合わせは、発行元の一般財団法人たんぽぽの家までご連絡ください。

https://newtraditional.jp/

NEW TRADITIONAL PLAYING BOOK 2022
楽しい実験と実践

発　　行：2023年3月31日
発 行 元：一般財団法人たんぽぽの家
〒630-8044 奈良市六条西 3-25-4
Tel 0742-43-7055　Fax 0742-49-5501　Mail nt@popo.or.jp

企画制作：たんぽぽの家（岡部太郎・後安美紀・酒井靖・中島香織・藤井克英・森下静香）

編　　集：MUESUM（多田智美・永江大・鈴木瑠理子）
デザイン：UMA/design farm（原田祐馬・西野亮介）

写　　真：コーダマサヒロ（表紙）
西岡潔（p.4｜1・2、p.9｜2、pp.30-31｜5・6・7）
衣笠名津美（p.6｜3・4、p.8｜1、pp.10-11｜4・5・6・7、p.15｜7、p.18｜5）
川﨑富美（p.9｜3）
都甲ユウタ（p.16-17｜1・2・3、p.21｜11、p.28｜1・2、p.29｜3・4）
林智子（p.15｜6、pp.26-27｜4・5・6・7）
三浦晴子（p.14｜3・4・5、p.20｜8・9、pp.24-25｜1・2・4）
河合秀尚（p.18｜4）
藤田和俊（p.19｜6・7）

協　　力：Good Job! センター香芝、たんぽぽの家 アートセンター HANA

本書は、文化庁委託事業「令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業」の一環で製作されました。

文化庁

NEW TRADITIONAL
https://newtraditional.jp/